

11 キャンプ的なもの：スーザン・ソンタグの『キャンプ』についてのノート

キャンプ (camp) とは、美学・文芸批評などで使われる様式／スタイルを指す用語である。その一つの意味—(of a man) behaving and dressing in a way that some people think is typical of a gay man—が示すように、同性愛者の芸術家が用いる表現手法や作品を批評・理論化する際によく使われる。一方で、より広く、既存の言説／様式を皮肉をもって表現することにも使われる。

キャンプという用語は、17世紀のフランスの劇作家モリエール (Molière, 1622-1673) が自身の作品で使い、その後英語圏へ導入されたと言われている。英語圏では、1960年代半ば、同性愛者達が自分たちのコミュニティで使用する隠語であり、「男性同性愛者の女性扮装者／ドラッグクイーン」(drag queen) が舞台上で繰り広げるユーモア・滑稽さを多分に含んだ表現手法を指していた (Newton)。しかしながら同時期に、スーザン・ソンタグ (Susan Sontag, 1933-2004) がこの言葉の解釈を文芸、美術、音楽、演劇や映画などの分野に広げる著作を発表し、一種の審美主義 (aestheticism) と定義した。これにより、キャンプは広く認知され、美学・文芸批評で用いられることになった。しかし1970年代終わり以降には、再び、主に男性同性愛者の表現手法に関する意味を含むことが主流となり、HIV感染、AIDS発症という社会背景とともに、「痛烈さ・鋭さのない自己満足的表現」(smugness with no edge)，また、そもそも示していた現象から離れてしまった (decamp) などと批判された。1990年代のクイア研究で言及されることもあったが、表現手法としてのキャンプはノスタルジックな「前AIDS時代」にのみ存在しうると批評されることもあった (Flinn 53)。

2010年代後半に入り、再びキャンプの審美主義的な側面が注目されるようになる。日本のファッションデザイナー、川久保玲がパリにて2018年3月にキャンプをテーマにコム・デ・ギャルソンのショーを開催し、2019年5月にはメトロポリタン美術館コスチュームインスティテュートで、“Camp: Notes on Fashion”という企画展が開催された。どちらも、ソンタグの1964年に出版された「《キャンプ》についてのノート」(Notes on “Camp”) を枠組みに構成したものである。“Many things in the world have not been named; and many things, even if they have been named, have never been described.” (275) これはその冒頭の一節だが、1960年代半ばに示された美学の概念を現在、再考、検証することの意義は何であるかを考える際の手がかりとして、以下、ソンタグの解釈を振り返ろう。

ソンタグは、キャンプの本質は“love of the unnatural: of artifice and exaggeration”

(275) にあるとしている。これを分析するには、それを愛好すること（そのような趣味（taste）があるということ）の根底に在る、「趣味」を生じさせる、首尾一貫した感覚を柔軟に言語化する必要があると述べている。キャンプは「とらえどころのない感覚」(fugitive sensibility) (277) であり、それを言語化するために、筋道のある議論より「書き留める」手法を選択している。58のメモ (notes) を介してキャンプは考察されているが、その中からキャンプ的なものの見方、趣味、感覚に焦点を当て振り返る。

キャンプとは審美主義、つまり存在する事象を芸術現象として捉える方法のことであり、それを見る際の基準はその内容や美ではなく、人工的であること (artifice) と様式化 (stylization) の度合いにある。つまり、ものや人の中に存在するキャンプを知覚することということは、その役割を敢えて演じているかのように一ありのままではない、誇張されたもの—理解することである。

キャンプ趣味は装飾的芸術 (decorative art) が意図するように、内容ではなく質感 (texture) や、感覚に訴える様式を強調するものである。言い換えれば、通常はその存在が認められていない事象に対する反応である。例えば、人ならば両性具有や本来の性に逆らうものと結びつく。つまり、審美主義というのは良し悪しを判断することではなく、芸術や現象に対して、別の、補助的な判断基準を提供するということである。また、同性愛=キャンプではなく、両者間には近似 (affinity) と重複 (overlap) の関係がある。また同性愛者はキャンプの前衛 (vanguard) であるから、都市文化において感覚を創造するものと捉えることができる。なぜなら、ものの表面を強調し、様式化するというキャンプ趣味の特質を投影し、正当化するのに同性愛者が適しているからである。

ゆえにキャンプ的感覚とは、あるものや現象を二重に感知、理解できることである。この二重とはこの語彙の定義と語彙が象徴するものということではなく、ありのままのものとそれ的人工的なものの差異を感知、理解できる感覚である。ソンタグは最後に、キャンプは「ひどいからいい」(it's good because it's awful) ということであると締めくくるが、審美の際に「ひどい」という判断基準が存在し、それを理解できるというキャンプの本質を一言で言いあらわしているといえるだろう。

(内藤 麻緒)